

南アフリカのカラード・コミュニティにおける 先住民アイデンティティの表出

佐 藤 千 鶴 子

目次

1. はじめに
2. カラードとは誰か
3. 先住民としてのコイ, サン
4. アパルトヘイトの終焉とカラード・アイデンティティ
5. コイサン復興運動の展開
6. おわりに

1. はじめに

2013年2月、国会の開会演説において南アフリカのズマ大統領は、1998年12月末にいったん締め切られた土地返還申請を再び認めるために法改正を行うつもりであること、現行では対象外となっているコイ（Khoi）、サン（San）の子孫への土地返還の道を開く用意があることを発表した¹⁾。

土地返還事業とは、白人支配体制のもとでの人種差別的な法律・慣行により土地を強制的に奪われた人々に対して、土地の回復・代替地の提供・金銭的賠償のいずれかの方法により、奪われた土地に対する権利回復を行うことを目的に、「土地権返還法」（1994年）に基づき民主化後に導入された政策である。同法は、1913年の「原住民土地法」以後の土地喪失のみを対象とするという期限を定めていたため、1652年にヤン・ファン・リーベック率いるオランダ東インド会社がケープタウンを食料補給地として開発することを決め、白人の入植を始めて以降、同地に住むコイ人が経験した土地喪失は、返還申請の対象外としていた。ズマ大統領の発言は、コイ、サンへの土地返還の可能性と方法を巡る議論を活性化させることになったが、そもそもズマ大統領がこのような発言を行ったこと自体、国内におけるコイサン（Khoisan, Khoi-San）

復興運動の興隆を反映したものであった。

歴史の授業において、南部アフリカの先住民としてその存在について学びつつも、南アフリカにおけるコイ、サンは20世紀にはもはや「絶滅した」と見なされていた(Elphick [1985: xviii]; Barnard [1992: 27-28]; Bredekamp [2000])。だが民主化後、アパルトヘイト体制下でカラードに分類されていた人々の間で、先住民(aboriginal, indigenous)としてのコイ、サン、コイサン・アイデンティティを主張する人々が出現したのである。彼らは、歴史を通じてカラード社会に統合・吸収されたとするこれまでの見解を否定し、カラードという呼称を拒絶し、先住民アイデンティティを主張するようになった。本稿では、なぜこのようなアイデンティティの変化が起こったのか。なぜ彼らは多様な文化を源とするクレオールとしてのアイデンティティではなく、先住民としてのアイデンティティを主張するようになったのか。彼らの主張の内容とそれに対する政府の対応について考察する。

2. カラードとは誰か

南アフリカにおいてカラードとは、多様な文化的・地理的起源を持つ人々を内包する集団を指すが、それが「人種」カテゴリーのひとつとして人々を分類するラベルとなったのはアパルトヘイト時代の「人口登録法」(1950年)においてであった²⁾。同法は、すべての南アフリカ人を「白人」、「黒人(アフリカ人)」、「カラード」の3つの「人種」に分類することを定めた³⁾、「白人でも黒人でもない人」がカラードとされた。このときカラードに分類された人々の祖先は、白人の入植以前からこの地に住む現地民(コイ、サン)、17世紀にケープタウンで白人の入植が始まってからこの地にもたらされた奴隷⁴⁾や植民地社会に移住してきたアフリカ人、白人入植者、そしてさまざまな組み合わせの異人種間性交・結婚を通じて誕生した人々であった(Adhikari [2005: 2])。

「人口登録法」は1991年に廃止され、持てる資産、住める地域、就職や昇進機会、利用できる公共施設(鉄道、公園など)、結婚が可能な相手などを人種ごとに制限してきたアパルトヘイト諸立法⁵⁾もすべて撤廃された。だが、これらアパルトヘイト諸立法とそれ以前の植民地支配や人種隔離の時代を通じて、歴史のなかで作られてきた人種間の経済格差は、法律の廃止により一夜にして消滅するものではなく、今日でも南アフリカにおける社会経済格差の諸相を著す上ではしばしば「人種」(人口集団)が参照される⁶⁾。また、居住と移動の制限が撤廃された後も、所得格差や住宅価格の高騰により、人種ごとに分かれた居住区の統合は簡単には進まないため、民主化後も人種は社会的マーカーであり続けている。2011年現在のカラード人口は約460万人、全国民に占める割合は8.9%にすぎないが、西ケープ州では人口の48.8%、北ケープ州では40.3%を占めており、白人の入植以前にバントゥ系アフリカ人がほとんど居住してい

南アフリカのカラード・コミュニティにおける先住民アイデンティティの表出 (佐藤)

なかった国土の西側約40%の地域においてはカラードが人口の多数派を形成している (Statistics South Africa [2012: 14, 17])。

南アフリカにおける「人種」ラベルがアパルトヘイト時代の遺物であり、その意味ではカラードという呼称が白人政権によって「上から」課されたものであることには疑いがない⁷⁾。だがその一方で、カラードが単なるアパルトヘイト政権の創造物ではないことも事実である。歴史家は、ケープの植民地社会において、19世紀末までに多くの元奴隷やコイおよびその子孫が、「原住民」から区別される「カラード」アイデンティティを持つようになったと論じている (Adhikari [2005: 2-3]; Erasmus and Pieterse [1999: 169-170])。カラードは、社会におけるステータス、共通言語、生活・居住空間の近接性といった要素により、ひとつの集団としてのアイデンティティをある程度まで共有するようになったのである。

カラードが西ケープ州と北ケープ州に集住していることはすでに述べたが、加えて、彼らはアフリカーンス語という共通言語を持つ。アフリカーンス語は、20世紀の南アフリカにおいては支配階級の言語と見なされ、その教育言語としての導入が1976年に起こったソウェト蜂起の直接的な原因ともなったが、もともとは17世紀のケープタウンにおいてオランダ系入植者と奴隷や現地民であるコイとの間の意思疎通のために誕生した言語だった。オランダ系入植者が「ハイ・ダッチ (high Dutch)」と呼ばれるオランダ語を話したのに対し、奴隷やコイが入植者の言葉を理解するために用いたのが「キッチン・ダッチ (kitchen Dutch)」と呼ばれる文法が簡略化されたオランダ語であった。この「キッチン・ダッチ」が後にオランダ系入植者によりアフリカーンス語として定式化されたのである (Mountain [2004: 98-99])。それゆえ、アフリカーンス語のそもそもの話者は奴隷やコイであり、その子孫であるカラードである、ということになる。

アパルトヘイト時代のカラードは、特権階級である白人と被抑圧者階級である黒人アフリカ人のどちらにも同一化できず、数的には常にマイノリティ (少数派) であるという人種的周縁性の問題を抱えている、と指摘されてきた (遠藤 [2003: 274]; Erasmus [2001]; Adhikari [2005: 17-19])。とりわけ、アパルトヘイト体制が人種ごとに受けられる特権を規定していたため、カラードは、白人への近接性を囁望しながら「十分には白くはない (not white enough)」(Adhikari [2005]) ことによる劣等意識と歪んだ美意識を持つようになった。明るい (fair) 肌の色を持つことが美しく、褐色の肌の色の濃さや、「ブッシュマン」や「ホッテントット」⁸⁾ と関連づけられる縮れた髪の毛が差別の対象とされ、髪をストレートにするためにカラードの女性たちは並々ならぬ努力を行った (Erasmus [2001])。白人の祖先とのつながりが強調され、カラード世帯では白人の祖先の写真が飾られる一方で、それ以外の祖先の存在は無視された。こういったカラードの人種意識には、外見上の検査で「白人」に分類されることで、白人のみが享受可能な特権を受けることができるという物質的なインセンティブも働いており、実際に「白人」

に分類された混血の人々もいた (Adhikari [2005: 11-16, 27-29]; Ruiters [2009: 111])。さらに、正当性を持たない異人種間性交・結婚の産物であるという烙印もあり、ケープフラッツ (Cape Flats) と呼ばれるケープタウンのカラード居住区を中心にカラード・コミュニティではギャング文化が繁栄することになった (Kynoch [1999]; Steinberg [2004])。

人種的周縁性の問題は、20世紀末の反アパルトヘイト運動の展開のなかで、ある程度までは克服を見た。というのも、1970年代以降、スティーブ・ビコ (Steve Biko) らによる黒人意識運動の影響を受けて、黒人であることを再評価し、積極的に黒人 (= 非白人) としての連帯意識を持つ人々が、特にカラードのエリート層のなかに出現したからである。このことは、カラードとインド系の人々に選挙権を与え、白人、カラード、インド系それぞれに別個の議会 (三院制議会) を設立するというボータ政権によるアパルトヘイト改革の提案に反対するために、1983年に設立された統一民主戦線 (United Democratic Front: UDF) の活動に示されている。UDFは、労働組合や教会、コミュニティ組織などの約600の団体・組織のアンブレラ組織として結成されたが、特にケープ州においてカラード・エリートが指導者として重要な役割を果たした。UDFを通じた解放闘争において、カラード・エリートは黒人として被抑圧者階級との同一化を図ったのである (Erasmus and Pieterse [1999: 170, 174-175])。

3. 先住民としてのコイ、サン

次に、民主化後、カラードの人々のなかで真のアイデンティティとして主張されるようになった先住民としてのコイ、サンとは誰か、南アフリカにおけるコイ、サンの歴史と現在について検討する。

南アフリカでバントゥ系アフリカ人以外の先住民を指す言葉として現在、一般に用いられる「コイサン (Khoisan), コイ・サン (Khoi-San)」⁹⁾ という呼称は、もともとは1920年代にドイツの人類学者によって用いられた造語であった (Barnard [1992: 7])。現在では、コイとサンの集合名詞として南アフリカで一般に使用されるが、そもそもコイとサンは歴史上では別個の集団として現れる。

コイとは、白人の到来以前から南アフリカ、特にケープ地方に住んでいた褐色の牧畜民を指す (Boonzaier et al [1996]; Mountain [2003: chap 3])¹⁰⁾。植民地時代には白人入植者により「ホッテントット (hottentot)」の蔑称で呼ばれた。彼らは、少なくとも今から2000年前までに、現在の東ケープ州西部からナミビア南部へと至る西ケープ州と北ケープ州の沿岸部一帯、そこからやや内陸に入った地域、そして現在の北ケープ州北西部に当たるオレンジ川下流域に居住するようになった。17世紀にオランダ人がケープタウンに要塞を築き、入植・定住を開始した頃、オランダ東インド会社との取引を担い、同社が必要とする牛を提供したのが、この地に住

南アフリカのカラード・コミュニティにおける先住民アイデンティティの表出 (佐藤)

むコイであった。当時のコイ社会は、伝統的首長（チーフ）を長とする複数の集団（トライブ）に分かれていたが、互いに理解可能なコイコイ語の方言を話していた¹¹⁾。特定の地域にほぼ一年を通じて定住している集団もあれば、季節により放牧地を移動する移牧を行っている集団もあった。ただし、集団ごとの領土認識は存在した (Elphick [1985: chap 3])。

オランダ東インド会社との交易は、当初は、装飾に使用する銅などを入手する上で有益であったが、コイが手放してもよいと考える以上の牛をオランダ東インド会社が欲したことや、交易を通じて得た嗜好品（特にブランデー）に対してコイの指導者が弱点となるような嗜好・依存を持つようになったこと、さらには、コイ集団間の放牧地を巡る争いや諍いを利用しつつオランダ東インド会社がコイ首長たちの権力の源泉であった牛を奪っていったことにより、ケープの伝統的コイ社会は弱体化していった (Schoeman [2009])。その上、フリーバーガー (free burgher) と呼ばれるオランダ東インド会社元社員が自由民としての入植と土地の開拓を認められるようになると、ケープの植民地社会へ労働者として組み込まれるコイや白人入植者の妾となるコイ女性が増加することになった。1713年に流行した天然痘により、免疫を持たなかった多くのコイが死亡した。結果、18世紀初め～中葉までに、ケープの伝統的コイ社会は完全に崩壊し、植民地社会のなかでカラードに吸収されることになった。その後、オランダ系入植者（アフリカーナー農場主）の内陸への移住（グレート・トレック）が始まると、内陸に住むコイやサンに対する労働力需要が高まり、20世紀初頭までに内陸においてもコイ社会は集団としてのまとまりや文化（特に言語）を喪失したと考えられている (Elphick [1985: chaps 8-12]; Barnard [1992: chaps 9 and 10])。

他方、サンは、コイより前から南部アフリカ地域一帯に住んでいた褐色の狩猟採集民である (Mountain [2003: chap 2])。「サン」とは、コイが家畜を持たない人々（狩猟採集民）を指して用いた呼称であり、そこには「家畜泥棒」や「ならず者」といった否定的な含意があった。また、狩猟採集民は白人の人類学者により「ブッシュマン」と呼ばれてきたが、この呼称にも差別的な含意がある (Barnard [1992: 8])。狩猟採集民自身は、クウェ (Khwe)、コマニ (= Khomani)、クン (!Xú) など、自らをより小さな集団名で呼び、サンやブッシュマンに相当する集合名詞は彼らの言語には存在しない。なお、これら集団間の言語は、多くの場合に意思疎通が不可能なほど異なっているという (Barnard [1992: 10-11])。

広い地域で発見されたロック・アートが、かつて狩猟採集民が南部アフリカ一帯で生活していたことを証明してきた。だが、彼らの生業形態が、牧畜民コイやバントゥ系農耕牧畜民と放牧地を巡って競合関係にあったため、サンはこれらの集団により僻地へと居住地域を追いやられた。19世紀に白人の入植が内陸へと拡大していくなかでは、狩りの対象にすらされた。捕捉されたサンのなかで特に子供は白人の農場における召使として植民地の労働力に組み込まれた。コイと同様に多くのサンがカラード社会に吸収され、20世紀にはごく一部の集団がカラハ

り国立公園と白人が経営する観光農場に存続するのみとなった¹²⁾。

19世紀以降、コイやサンを祖先に持つ人々の多くが、公式には「カラード」ないし「原住民」として分類されることになった。Besten [2009: 135-139]によれば、植民地法制の多くがコイとサンを「原住民 (Aboriginal Natives)」として分類しようとしたが、原住民カテゴリーに入れられることは原住民に課された差別の対象となる可能性を持っていたため、コイ、サンおよびその子孫の多くがカラード・アイデンティティを選択し、ヨーロッパ人側の祖先を強調する傾向を持っていたという。このことは、植民地主義体制のもと、白人がコイとサンに与えた「ホットトット」や「ブッシュマン」という呼称が劣等性や原始主義と関連づけられ、差別や嘲笑の対象とされたことで、よりいっそう強められた (Adhikari [2005: 27-29])。

ところが、1994年に南アフリカが民主化を達成すると、カラードとされた人々のなかで先住民としてのコイサン・アイデンティティを主張する人々が出現した¹³⁾。民主化以前は抑圧されていたコイサン・アイデンティティがどのように出現してきたのかが、次節以降の検討課題である。

4. アパルトヘイトの終焉とカラード・アイデンティティ

カラードの政治的アイデンティティに対する注目が高まったのは、1994年に行われた第1回全人種参加総選挙の結果が明らかになったときである。解放闘争と1990年代初頭の民主化交渉において主導的な役割を果たしたアフリカ民族会議 (African National Congress: ANC) が、国政と全国9州のうち8州において圧倒的な得票率で与党の地位を獲得したのに対し、カラード有権者が全有権者の半数以上を占める西ケープ州においては、アパルトヘイト政権を担った国民党が勝利した。カラード有権者の実に6割以上が国民党に投票したと考えられている (James, Caliguire and Cullinan eds. [1996])。この選挙結果は、20世紀末の反アパルトヘイト運動におけるカラード・エリートの人々との同一化がいかに表層的かつ限定的なものであったかを示すとともに (Adhikari [2005: xiii])、カラードの労働者階級の間で「特権」を失うことに対する不安がいかに大きいかを浮き彫りにするものであった。

西ケープ州におけるカラード労働者の不安は、民主化後、貧しい東ケープ州から相対的に豊かで設備の整っている西ケープ州へと移動するアフリカ人 (主にコーサ人) が増加し、既存のタウンシップの周辺部に掘っ立て小屋を建てて非正規居住区を形成していく一方で、そのようなスラム居住者のために政府が低所得者住宅の建設を進めていったことによって倍増した。政府の資源が、自分たちカラードではなく、すべて黒人アフリカ人の社会経済的向上のための事業に向けられているとの意識は、アフーマティブ・アクションによっても強化された (Caliguire [1996]; Hendricks [2005])。

1998年、アパルトヘイト時代の差別に基づく格差を是正し、職員や役職構成に人種とジェンダーを反映させることを目的とする「雇用均等法」が制定されると、全国的な人種構成と州の人種構成が著しく異なる西ケープ州において問題が顕在化した。カラードは全国的にはわずか9%に過ぎないが、西ケープ州では人口のおよそ半分を占める。加えて、アパルトヘイト政府が西ケープ州においてカラード労働者優先政策を採用していたため、公務員やサービス産業において多数のポストをカラードが占めていた (Ruiters [2009: 105])。雇用均等法により、新規雇用の際にアフリカ人が優遇されるのみならず、役職間での人種格差を是正するため、時には経験の浅いアフリカ人が古参の職員よりも早く昇進の機会を与えられた。2013年4月末には、西ケープ州の白人刑務官とカラードの刑務官総計10名が、昇進の際に人種差別を受けているとして、労働裁判所に雇用主である矯正省と労働大臣を訴えるに至った (*Cape Times*, 30 April 2013)¹⁴⁾。

民主化後に社会経済的不平等を是正するためのプログラムを受けるにはカラードは「十分に黒くない (not black enough)」 (Adhikari [2005: 175-176]) との悟りは、カラードによるアイデンティティの模索と再構築のきっかけとなったが、その方向性はひとつではなかった。

一部のカラードは、黒人とは異なる存在としてのカラード意識を強く自覚するようになった。その極端な形態が「カラード抵抗運動 (Kleurling Weerstandsbeweging: KWB)」である (Caliguire [1996: 10]; Erasmus and Pieterse [1999: 175-176]; Ruiters [2009: 116-118])。分離主義的レトリックをかかげた KWB は実際にはカラードの間で注目に値するような支持を得たわけではなかったが (Adhikari [2005: 185])、黒人ではなくカラードであるという自己認識を再確認した人々は多かった。2009年に公開されたドキュメンタリー映画「私は黒人ではなくカラードである——喜望峰におけるアイデンティティの危機 (I'm Not Black, I'm Coloured: Identity Crisis at the Cape of Good Hope)」のなかでは、複数のカラードの元活動家が次のような証言をしている。「1980年代 [の解放闘争時代]、自分は黒人だと思っていた。けれども、1994年以後、自分は黒人ではなく、カラードであるとわかった」¹⁵⁾。「カラード」という用語に抵抗を感じる人々は「褐色人 (ブラウン・ピープル)」 (アフリカーンス語でブルインメンサ Bruinmense) を自称し、褐色人の利益を前進させることを掲げる政党や団体も複数結成された¹⁶⁾。

他方で、カラード・アイデンティティを歴史的に日の浅い、アパルトヘイトの産物として拒絶する人々も出現した。彼らは、「『カラード』というアイデンティティを受け入れることは自分が歴史を持たないことを意味することになる」と述べ¹⁷⁾、コイサンこそがカラードの真のアイデンティティであり、自分たちは南アフリカの先住民である、と主張した。カラードの人々の間でのルーツと帰属意識への渴望は、1990年代後半から南アフリカにおけるコイサン復興運動を率いてきた2人の指導者¹⁸⁾の次のような発言にも現れている。

黒人は、われわれが祖先のルーツを持たないがゆえ、われわれに敬意を示さない（ジョセフ・リトル <Joseph Little> の発言, Quoted in Besten [2009: 146]）。

われわれの遺産についての意識を高める必要がある。われわれが誰であるかについての誇りを再導入しなければならない。・・・帰属意識の欠如がギャングの繁栄をもたらしている。・・・「カラード」を自ら称しても、自分がどこから来たのかを知ることはできない（セシル・ルフリア <Cecil le Fleur> の発言, Quoted in Garman [2001]）。

コイサン・アイデンティティを受容し、主張する過程は、カラードの人々にとって、自己肯定と自己発見の過程であると同時に、社会経済的資源に対する権利の感覚を育成するものでもあった（Besten [2009]; Ruiters [2009]）。民主化後、政府の出版物の多くにおいて「黒人」が「アフリカ人」と言い換えられたことに対して、あるコイサン活動家は次のような問いを投げかける。「黒人でないならば、アフリカ人を名乗ることはできないのか？」¹⁹⁾。民主化後にカラード・コミュニティの間で起こったコイサン・アイデンティティの表出は、アパルトヘイト時代に「カラード」と定義された人々の間でのアイデンティティの揺らぎと探求プロセスの一環であると同時に、社会経済的資源に対する権利の主張形態でもあった。次節では、彼らが主張した「権利」の内容について詳しく見ていきたい。

5. コイサン復興運動の展開

民主化後の南アフリカにおけるコイサン・アイデンティティの復活は、世界各地における先住民の権利と文化に対する国際的な関心の高まりをも反映していた²⁰⁾。1990年代半ば以降の南アフリカのコイサン運動にはいくつかの系譜が存在するが（Bredekamp [2000]; Lee [2003]; Besten [2009]; Waldman [2007]）、ここでは西ケープ州のカラードを中心に発展したコイサン復興運動に焦点をあて、運動の展開と要求、現状、今後の課題を検討する。

5.1 コイサン問題に関する2つの会議

ケープタウンを中心とする西ケープ州のコイサン復興運動の展開においては、1997年と2001年に開催された2つの会議が重要な役割を果たした。1997年7月12～16日にケープタウンの南アフリカ博物館で行われた「コイサン・アイデンティティと文化遺産（Khoisan Identities and Cultural Heritage）」と題する国際会議を組織したのは、旧カラード大学の西ケープ大学歴史調査研究所（Institute for Historical Research, University of the Western Cape: IHR-UWC）であった。コイサン問題について過去2回（1991年、1994年）開かれた国

南アフリカのカラード・コミュニティにおける先住民アイデンティティの表出 (佐藤)

際会議とは異なり、この会議には南部アフリカのコイサン・コミュニティ²¹⁾のメンバーやケープタウンに住む「非白人」インテリなど62名のコイサン代表が出席したが、その数は研究者や政策担当者の参加者数を上回るものであった。同会議の内容自体は研究者によるアカデミックな研究報告が中心であったが、コイサン代表は会議の準備段階から積極的に関与し、一般公開日に行われた開会式典で詩や物語の朗読や歌を披露したほか、会議中に2回にわたり設けられた「コイサン・フォーラム」の場では政治的要求を掲げた雄弁なスピーチを行った (Bank ed. [1997: 1-2])。

開会式典では、人類学や言語学を専門とする研究者の参加者を驚かせるような出来事もあった。そのときの様子を会議に参加した研究者はこう記している。

西ケープ州に住む11人のカラードが、1650年代にケープでヤン・ファン・リーベックが出会った11のコイ集団(クラン)の現在の首長(チーフ)として満席の会場で紹介された。これらのクランのいくつかは、18世紀初頭までに事実上一掃されたものであった。17世紀と18世紀の記録に大枠で従った想像力豊かな正装に身を包み、「われわれの遺産を取り戻す」ことを熱心に語る首長の出現は、党派的な聴衆により熱狂的に受け入れられた (Lee [2003: 101])。

この会議をきっかけに、リトルらにより西ケープ州のコイの代表組織として「ケープ文化遺産発展組織 (Cape Cultural Heritage Development Organisation: CCHDO)」が結成され (Garman [2001]; Besten [2006: chap 12; 2009: 145-148])²²⁾、リトルは「グリクワ民族会議 (Griqua National Conference: GNC)」のルフリアとともに、1990年代末から2000年代前半にかけて南アフリカのコイサン運動を牽引する役割を果たすことになった (NKCC [2001])。1997年の会議は、ケープタウンのカラードの間で生じつつあったコイサン復興運動に公式なプラットフォームを提供するとともに、南アフリカにおけるコイサン運動のその後の舵取り手を決める上でも重要な意味を持っていたのである。

他方、2001年3月29日~4月1日に西ケープ州オウツション (Oudtshoorn) で開催された「全国コイサン協議会議 (National Khoisan Consultative Conference)」には、南アフリカ各州から36のコイサン・コミュニティの代表440名以上が参加した。組織委員長を務めたIHR-UWCのブレデキャンプ (Henry Jatti Bredekamp) 教授によれば、同会議は1997年会議の後継という側面を持ちつつも、それに加え、2000年にボツワナのハボローネ (Gaborone) で予定されていたコイサン問題に関する第4回国際会議が中止となったことを受けてIHR-UWCが南アフリカ各地で実施したコイサン組織や代表者との一連のワークショップの結果でもあった。ワークショップ参加者は、全国のコイサン組織の代表が一堂に会し、自らを取り巻

く問題群を話し合うための全国的な会議を開催する必要性で一致した。結果、ブレデカンブ教授を長とする10名の組織委員会が結成され、同会議ではコイサンの宗教、文化、アイデンティティ、遺産、言語、知的所有権、国際連携、メディアでの取り上げられ方などが話し合われた(NKCC [2001])。

5.2 コイサン復興運動の要求と成果

次に、コイサン復興運動の具体的な要求についてみてみたい。2000年にIHR-UWCが各地で行ったワークショップでコイサン組織の代表者が懸念や課題として指摘したのは12項目——①コイサンの宗教的価値の回復、②憲法における最初の(first)先住民としての承認、③コイサン・アイデンティティと文化の復興、④知的所有権と土着の知(indigenous knowledge)の承認、⑤全国コイサン遺産プロジェクトの実施、⑥遺骨の返還、⑦土地権の返還と経済力強化、⑧メディアにおける表象、⑨学校カリキュラム、⑩観光におけるコイサン遺産と文化の促進、⑪過去、現在、将来にわたるコイサン女性の役割、⑫より代表性の高い全国的なコイサンNGOとグローバルなネットワーク形成の必要性——にわたっていた(NKCC [2001: Annex D])。本稿では、このなかから(1)憲法承認、(2)土地権返還、(3)遺骨返還の3つの点について掘り下げる。

コイサン復興運動の要求のもっとも根幹にあるのは、コイ、サンを南アフリカにおける最初の先住民として認めることを憲法に明記せよ、という要求である。この要求は、コイサンが「先住民(aboriginal)」であり、南アフリカにおける「最初の原住民(first native)」であるという事実や、「国連決議が〔コイサン集団のひとつである〕グリクワに対して『ファースト・ネーションの地位』を認めており、南アフリカ政府は国連の人権宣言の署名国である」ということに基づいている。さらに、この要求には、中央、州、地方のすべてのレベルの政府においてコイサンの代表権を認めることや、コイサン言語、文化、宗教の復興保全が含まれる(le Fleur [2001])。

コイサンの憲法承認の問題は、1999年に政府が設立した全国コイ・サン評議会(National Khoi-San Council: NKC)²³⁾が正式な交渉の場となってきた。NKCは、コイサン集団を5つの下位集団——①グリクワ、②コラナ(Korana)、③ナマ>Nama)、④ケープコイ(Cape Khoi)、⑤サン——に分けたうえで、各下位集団の代表21名によって構成され、リトルが初代委員長を務めた(DPLG [2011])。

NKC設立自体は、先住民の権利と文化に対する国際的な関心の高まりを背景に、国内において発展したコイサン復興運動に対する南アフリカ政府の対応として評価できるものである。だが、これまでのところ、NKCによる実質的な成果は限られている。NKCの主たる目的は、憲法におけるコイサンの地位の承認を中心に、コイサン運動のさまざまな要求を政府と話し合

南アフリカのカラード・コミュニティにおける先住民アイデンティティの表出 (佐藤)

うことであった。その前提として NKC には、コイサン集団の起源や分化、指導者とその構造や各時代の政府との関係、居住範囲と移住の歴史について調査を実施し、「現状報告書」を取りまとめることが期待されていた。民主化後、コイサン運動の指導者の多くが、すでに絶滅したと考えられていたコイサン集団(トライブ)の首長ないし王であると主張したことに対して、同報告書は、歴史的な史料や口頭伝承といった証拠に照らし合わせて主張の真偽を明らかにすることを意図していた。だが、現状報告書の進捗状況についてはこれまでのところ何も公にされていないばかりか、NKC が活動内容に関する情報公開を怠ったため、コイサン集団のなかでの NKC に対する批判が高まることになった (DPLG [2011]; Ntsewa [2013]; De Wet [2010])。

土地に対する権利の承認要求も難航しており、本論の冒頭で述べたように、政府がコイサンへの土地返還の可能性について検討することを明言したのは 2013 年になってからであった。コイサン復興運動の土地返還要求の実現がきわめて難しいのは、それが、彼らの「先住民」としての地位に基づいたものとして言明されているからである。ケープタウンのコイサン活動家はこう主張する。

ここにきたものは誰であれ、どこから来たにしろ、ここでわれわれ〔コイサン〕に出会った。われわれがこの地の本来の住人である。われわれは自分たちの土地と言語が認められることを望む。土地を持つことができれば、文化的奴隷状態を終わらせることができる。ヨーロッパ人がここに来る前は、われわれは主権を持つ人民であった (Quoted in Besten [2009: 147])。

けれども、コイサンは、歴史的な土地の完全なる回復や、コイサン・ホームランドあるいはコイサン国家の建設を求めているのではない、という。「われわれは、すべての移民が国を離れるべきだと言っているのではない。土地は十分にある」 (Quoted in Besten [2009: 147])。コイサンの土地に対する権利要求は、経済的資源としての土地に対する権利の主張でもあり、新生南アフリカのなかでの分け前に対する要求なのである。

コイサン復興運動の要求のなかで、実現を見た項目もある。それが、外国に渡った遺骨の返還要求である。もっとも有名なものは、「ホッテントット・ビーナス」の名で知られたコイ女性、サラ・バートマン (Sarah Bartmann) の遺骨返還要求であった。バートマンは、19 世紀初頭、原始的なアフリカ人の容姿の生きた展示品 (見世物) として、南アフリカからヨーロッパに連れて行かれた。彼女の死後、その遺体はパリの人間博物館で保持され、1974 年まで展示された。コイサン活動家と南アフリカ政府による返還キャンペーンの後、バートマンの遺骨は 2002 年になってフランスの博物館から南アフリカに返還され、生地である東ケープ州に埋葬されて記念碑が建てられた (Mountain [2003: 76-78]; Besten [2006: 330-342])。

5.3 コイサン復興運動の拡大と現在

2001年のオウツション会議は、全国のコイサン組織の代表が一堂に会してコイサン問題について話し合う場としては最初で最後のものとなった。同会議の後、決議の実行をモニターするためにNGO組織として「全国コイサン協議会議（National Khoisan Consultative Conference: NKCC）」が結成されたが、財政難などを理由にNKCCは2000年代半ばから実質的な活動停止状態に陥ったからである²⁴⁾。

けれども、南アフリカにおける2つの異なる政策発展がコイサン復興運動の拡大をもたらした。第一に、「雇用均等法」や「黒人の経済力強化法」（2003年）といった格差是正策が実施されていくなかで、民主化後の政府に対して不満を抱くカラードの人々は増加していった。第二に、2003年の「伝統的指導者枠組み法」とその後の動向は、伝統的指導者として政府に認定されることに伴う利得を増加させた。その結果、以前は労組やコミュニティ組織の指導者として活動してきたカラードのなかで、自らのルーツや帰属意識を振り返り、コイサン復興運動に身を投じる人々が出現した。2000年代半ば以降、南アフリカでは多数のコイサン組織が誕生し、コイサンを自称する人々が増加した一方で、コイサン復興運動としての一体感が薄まり、政府との交渉権や各組織の正当性を巡って複数の組織がときに対立する状況となった。

すでに述べたように、1990年代後半におこったコイサン復興運動の指導者の多くが、人々の支持と正当性を得るためにかつて絶滅したと考えられていた特定のコイ集団（トライブ）の首長を名乗ったが、その傾向は2000年代半ば以降に誕生した新たなコイサン組織において特に顕著であった²⁵⁾。その背景に「伝統的指導者枠組み法」がアフリカ人の伝統的首長や王に対して一定の報酬を支払うことを定めたことや、地方政府における伝統的指導者の関与や発言権が増加したことがあることは疑いがないが、この状況はコイサン復興運動の要求内容や政府との交渉にも影響を与えた。先住民としての地位の承認要求が、いつの間にか首長と王の地位の承認とそれに伴うベネフィットの要求にすりかえられ、後者をめぐる議論が政府との交渉の中心となったのである（DPLG [2011]; Ntsewa [2013]）。結果、誰が首長としてふさわしいかをめぐる非難合戦や権力闘争も生まれた。

他方、正当性をめぐる組織や個人の対立を不毛なものとして退け、コイサンの言語や遺産、文化の回復・保全・促進活動に注力する団体もある。現在、南アフリカでは11言語が公用語として指定されているが、そこにはコイサン言語はひとつも含まれていない。コイサン活動家が注目したのは、北ケープ州北部に住む年長者の間でわずかに話されており、隣国ナミビアに多数の話者がいるナマ語であった。コイコイ語の方言のひとつとされるナマ語は19世紀にナミビアで書き言葉となり、今日では近代化された正字法を持っている。ナミビアのナマとの交流や連携を通じてナミビアに残る文化的資源を活用し、ナマ語を学習したり、伝統的衣装やダンスを復興させようとする活動が、ケープタウンを中心に行われている²⁶⁾。

6. おわりに

本稿では、南アフリカのカラード・コミュニティのなかで先住民としてのコイサン・アイデンティティが民主化後に表出した背景とその内容について検討した。この過程は、第一義的には、アパルトヘイトの終焉により、固定化された人種観念から解き放たれ、アイデンティティを自由に模索できるという環境において、アパルトヘイト時代に「上から」課された残余のカテゴリーとしての「カラード」を拒絶し、自らのルーツと帰属意識を見出そうとする人々のアイデンティティの思索であった。だが同時にそれは、新たな政治体制のもとで実施された雇用均等や黒人の経済力強化という、アパルトヘイト体制のもとで作り出された人種格差を是正するための政策に対する反応でもあった。新たな体制のもとで、自分たちの社会経済的権利を主張するために先住民という地位に価値が見出されたのである。

だが、コイサン復興運動が主張する先住民としてのアイデンティティとその認知は、南アフリカの文脈では一筋縄ではいかない複雑さを持っている。南アフリカには、コイサンよりもはるかに数が多い、もうひとつの先住民、バントゥ系アフリカ人が存在するからである。歴史的に見れば、バントゥ系アフリカ人が中央アフリカ付近から現在の南アフリカ北部および東部へと南下してくる以前に、サンとコイが南アフリカに居住していたことには疑いがない。だが、バントゥ系アフリカ人は、ヨーロッパ人入植者よりも「先に」南アフリカに居住しており、征服と植民地化によって近代南アフリカに組み込まれたという点では、コイサンと同じ征服された歴史を持つ。しかもバントゥ系アフリカ人は、植民地支配やアパルトヘイト期には社会の底辺に置かれた。

ズマ大統領による国会開会演説を受け、2013年4月15～16日、農村開発土地改革省が北ケープ州キンバリーに全国のコイサン組織の代表を集め、コイサンへの土地返還の可能性と方法について議論する場を設けたが²⁷⁾、その際の伝統問題省高官の次のような発言は、おそらく多くのアフリカ人政治家や役人が共有しているものである。

初めに述べておきたいのは、私に対応しているのが、いわゆる先住民 (indigenous) コミュニティないしファースト・ネーションではないということである。なぜならば、これまでのところ、このことは確立されておらず、南アフリカのどのコミュニティも、ほかのアフリカ人コミュニティよりも自分たちがより先住民であると主張できるからである。われわれの理解では、内部に多様性を持ちつつも、〔アフリカ〕大陸の土着の住民 (indigenous inhabitants) はみなアフリカ人である (Ntsewa [2013])。

コイサンもバントゥ系もみなアフリカ人であるという見解の前では、コイサン復興運動による

先住民性の主張の前途は多難であるように思われる。

しかしながら、先住民性の認証という核を外れた部分でのコイサン・アイデンティティをめぐる民主化後の展開には重要な成果があったことも忘れてはならない。2000年代半ば以降、西ケープ州と北ケープ州を中心に各地でコイサン組織・団体が結成され、コイサンを自称する人々が増加したが、そのことは、かつてカラード・コミュニティにおいて嘲笑的であったコイサンの祖先に対して正当な評価を与え、その遺産を肯定的に捉える人々が増えたことを意味する。エスニシティを過度に強調することが、南アフリカの国民統合を逆行させる危険性をはらんでいることは否定できないが、自己と他者の両方によって差別され、抑圧されてきたコイサンの言語や文化の回復・復興活動は、カラードの人々が民主化後の南アフリカで持つべき誇りの醸成と自己肯定の意識にも貢献しうるだろう。

注

- 1) State of the Nation Address by His Excellency Jacob G Zuma, President of the Republic of South Africa on the occasion of the Joint Sitting of Parliament Cape Town, 14 February 2013, <http://www.info.gov.za/speech/DynamicAction?pageid=461&sid=34250&tid=98676>, 2014年1月6日アクセス。
- 2) 現在では、この3つに「インド（アジア）系」を加えた4つの「人種」分類が一般に使用されるが、当時はインド系はカラードに含まれた。
- 3) 南アフリカ政府による「人種」の呼称は時とともに変化してきた。白人（White）は当初はヨーロッパ系（European）、黒人（Black）は20世紀初頭までは原住民（Native）と呼ばれたが、1950年代にバントゥ系（Bantu）、その後、黒人となった。民主化後、政府の文書において黒人はアフリカ人（African）に置き換えられたが、日常生活やメディアなどでは「黒人」あるいは「黒人アフリカ人（Black African）」も使用される。なお、南アフリカで「黒人（Black）」といった場合、カラードとインド系を含めて、アパルトヘイト時代に差別の対象となっていた「白人以外のすべての人々」を指すこともある。それゆえ、「黒人」が具体的に誰を指しているのかは、文脈によって判断する必要がある。
- 4) ケープ植民地社会にもたらされた奴隷の主な出身地は、モザンビーク、マダガスカル、インド、スリランカ、インドネシアであった（Adhikari [2005: 190 note 3]）。
- 5) 土地法（1913年、1936年）、集団地域法（1950年）、人種別施設保留法（1953年）、異人種間結婚禁止法（1949年）、改正背徳法（1950年）など。
- 6) 最新の国勢調査（2011年）によれば、世帯ごとの平均年収は、白人が36万5,134ランドであるのに対し、カラードが11万2,172ランド、インド系が25万1,541ランド、アフリカ人は6万613ランドであった（Statistics South Africa [2012: 42]）。2011年12月末時点での為替レートは1ランド=約9.5円。
- 7) 外見的には、褐色の肌、白人のようにストレートではないが黒人のような髪質でもない、などの一定の共通性があるものの、たとえばコーサ人のなかにも肌の色が薄い人がおり、実際には外見上でカラードをひとくくりにするのは困難である。
- 8) サン、コイに対して白人入植者が用いた蔑称。詳しくは第3節参照。
- 9) 現在では、現代ナマ語の正字法に従い「Khoesan（コイサン）」、「Khoe-San（コイ・サン）」と表記

南アフリカのカラード・コミュニティにおける先住民アイデンティティの表出 (佐藤)

する研究者もいる。また、ハイフンを入れた表記は、サンとコイが遠い祖先を共有しつつも、ある段階で生業が分離し、異なる文化・言語・アイデンティティを持つ別個の集団を形成するようになったことを認識・強調するために用いられるが (Besten [2009: 135]), ここでは記述が煩雑化するのを避けるため、ハイフンなしの表記に統一する。

- 10) 南アフリカにおけるコイの祖先は、現在のボツワナ北部において、狩猟採集民が牧畜をするようになったことで別の集団へと分化し、南下したと考えられている。よって、人種的にはコイとサンは同一の祖先を持つ (Elphick [1985: chap 1]; Barnard [1992: 29-36])。
- 11) オランダ人が到来した 17 世紀中葉のコイ集団は大きく 3 つに分けられる。東ケープ州から西ケープ州の沿岸部一帯から内陸にかけて居住していたのがケープコイ (Cape Khoi) であり、そこにはコホクワ (Cochoqua), ヘセクワ (Hessequa), アタクワ (Attaqua) などの集団が含まれた。北ケープ州の大西洋沿岸からナミビア南部にかけてはナマ (Nama) が、オレンジ川下流域にはコラナ (Korana) が居住していた (Elphick [1985: xvi-xvii, 51]; Barnard [1992: 156])。
- 12) コマニ・サン (= Khomani San) として知られるこの集団は、民主化後の土地返還事業を通じてカラハリ越境国立公園で狩猟採集を行う権利を得た (Lee [2003: 91-94]; Glyn [2013])。
- 13) 歴史上のコイ、サンや、民主化以前からコイ、サン・アイデンティティを主張していた一部の集団と区別して、ネオ・コイサンあるいはネオ・コイ (コイコイ) と呼ばれることもある。この呼称は、彼らのアイデンティティの真正性を疑うものとして拒絶する人もいるが、アイデンティティの変化を分析するための用語として便宜的に使用する研究者もいる (Besten [2009: 154 note 35; 2006: chap 12]; Lee [2003: 96])。
- 14) 雇用均等法の是非を問うものとしてメディアの注目を集めた同裁判の判決は 2013 年 10 月に出され、労働裁判所はカラード刑務官の要求を認め、雇用均等計画作成の際には、全国的な人種構成のみならず、州ごとの人種構成も考慮すべきである、とした。けれども、白人は雇用均等法の対象となる「歴史的に不利益を被ってきた人々」の定義には当てはまらないとし、白人刑務官の訴えは退けた (Cape Times, 21 October 2013)。同判決に対して、国と白人刑務官を代表する労組ソリダリティ (Solidarity) の双方が上訴した (Cape Times, 3 January 2014)。
- 15) このドキュメンタリー映画はインターネットのユーチューブなどで見ることができるが、製作元のホームページは次のとおりである (<http://www.mondeworldfilms.com/#!inbic-home/cld63>, 2014 年 1 月 7 日アクセス)。
- 16) 褐色民族主義前線 (Brown Nationalist Front), 褐色民主党 (Brown Democratic Party), カラード・フォーラム (Coloured Forum) など (Adhikari [2005: 185])。
- 17) 2013 年 8 月~11 月にケープタウンで実施したコイサン活動家のインタビューにおいて、筆者はこの種の発言を繰り返し聞いた。
- 18) リトルルフリアがそれぞれ率いる組織については第 5 節参照。
- 19) Cornelius Kok 氏, グリクワ首長, インタビュー (2013 年 8 月 21 日, ケープタウン)。
- 20) 国連は 1993 年を「世界の先住民の国際年」と定め、1995 年~2004 年の 10 年間を「世界の先住民の国際の 10 年」とすることを宣言した。
- 21) 西ケープ州ナイズナ (Knysna) とプレッテンバーグベイ (Plettenberg Bay) に住むグリクワ (Griqua), ナミビア中央部のダマラ (Damara), ボツワナ大学のバサルワ (Basarwa) 学生, カラハリ砂漠の辺境部に住む複数のサン・コミュニティの代表などが会議に参加した (Lee [2003: 101])。グリクワは、アパルトヘイト時代から「カラード」に分類されることを拒絶し、固有のアイデンティティを持つ集

- 団として認められることを政府に要求してきた。グリクワの歴史は複雑であるが、比較的多くの文書資料が残っていることもあり研究書の数は多い (Ross [1976], Waldman [2007], Besten [2006])。グリクワは現在では南アフリカ各地に居住しているが、ナイズナのほかに比較的多くが集住するのはケープタウン、北ケープ州のグリクワタウン (Griquatown)、クワズールー・ナタール州南部のコークスタッド (Kokstad) である。なお、バサルワはサンに対するツワナ語の呼称である。
- 22) Besten [2009: 154 note 39] によれば、リトルとその仲間は名前がよく似た2つの関連した組織を結成しており、両者は混同しやすい。もうひとつの組織名は「ケープ文化遺産開発評議会 (Cape Cultural Heritage Development Council: CCHDC)」で、こちらのほうが目立った活動をしたという。
- 23) NKC は、1997年に設立された全国グリクワ・フォーラム (National Griqua Forum) を前身に持つが、このことはグリクワが南アフリカにおけるコイサン運動の先駆者であることを反映している (DPLG [2011]; Waldman [2007: chap 2]; Besten [2006: chap 11])。
- 24) Priscilla de Wet 氏インタビュー (2013年11月29日、ケープタウン)。De Wet 氏は、NKCCの事務局を務めた。
- 25) コイサン首長を名乗る人々のなかには、コラナのカッツ (Katz) 一族、タイボス (Taaibosch) 一族、グリクワのコック (Kok) 一族など、家計図や口頭伝承により、かつての王や首長の家系であることを証明できる人々もいるが、多くが自ら決めた (self-appointed) 首長であると考えられている。
- 26) Bradley van Sitters 氏、コイ・サン活動啓発グループ (Khoe San Active Awareness Group: KSAAG) 代表インタビュー (2013年8月20日、ケープタウン)。
- 27) <http://www.ruraldevelopment.gov.za/services/270-documents-for-branches/400-national-khoi-san-dialogue-15-16-april-2013>, 2014年1月8日アクセス。

参考文献

- 遠藤貢, 2003, 「新生南アフリカにおける『紛争』の様式—再生産される『暴力の文化』—」武内進一編『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐって—』日本貿易振興機構アジア経済研究所, 263-296頁。
- Adhikari, Mohamed, 2005, *Not White Enough, Not Black Enough: Racial Identity in the South African Coloured Community*, Athens: Ohio University Press.
- , 2009, "From Narratives of Miscegenation to Post-Modernist Re-Imagining: Towards a Historiography of Coloured Identity in South Africa", in Mohamed Adhikari, ed., *Burdened by Race: Coloured Identities in Southern Africa*, Cape Town: UCT Press, pp.1-22.
- Bank, Andrew, ed., 1997, *The Proceedings of the Khoisan Identities and Cultural Heritage Conference*, organised by the Institute for Historical Research, University of the Western Cape, held at the South African Museum, Cape Town, 12-17 July 1997.
- Barnard, Alan, 1992, *Hunters and Herders of Southern Africa: A Comparative Ethnography of the Khoisan Peoples*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Besten, Michael, 2006, "Transformation and Reconstitution of Khoe-San Identities: AAS Le Fleur I, Griqua Identities and Post-Apartheid Khoe-San Revivalism (1894-2004)", PhD Dissertation, University of Leiden.
- , 2009, "We Are the Original Inhabitants of This Land': Khoe-San Identity in Post-Apartheid South Africa", *Journal of Southern African Studies*, 35(1), 114 (662)

- Africa”, in Mohamed Adhikari, ed., *Burdened by Race: Coloured Identities in Southern Africa*, Cape Town: UCT Press, pp.134-155.
- Boonzaier, Emile, Candy Malherbe, Andy Smith and Penny Berens, 1996, *The Cape Herders: A History of the Khoikhoi of Southern Africa*, Claremont: David Philip.
- Bredenkamp, Henry C. Jatti, 2000, “Defining Khoisan Identities in Contemporary SA: A Question of Self-Identity?”, Department of History and Institute for Historical Research of the University of the Western Cape, South Africa and Contemporary History Seminar, 9 May, No.116.
- Caliguire, Daria, 1996, “Voices from the Communities”, in Wilmot James, Daria Caliguire and Kerry Cullinan, eds., *Now that We Are Free: Coloured Communities in a Democratic South Africa*, Cape Town: IDASA, pp.9-15.
- Department of Provincial and Local Government (DPLG, South Africa), 2011, “Background Information on the National Khoisan Council”, <http://www.dta.gov.za/index.php/speeches/deputy-general/67-background-information-on-the-national-khoi-san-council-.html>, 2013年7月29日アクセス。
- De Wet, Priscilla, 2010, *South Africa’s Unfinished Business: The First Nation Indigenous KhoeSan Peoples*, Germany: Lap Lambert Academic Publishing.
- Elphick, Richard, 1985, *Khoikhoi and the Founding of White South Africa*, Second Edition, Johannesburg: Ravan Press.
- Erasmus, Zimitri, 2001, “Introduction: Re-imagining Coloured Identities in Post-Apartheid South Africa”, in Zimitri Erasmus, ed., *Coloured by History Shaped by Place: New Perspectives on Coloured Identities in Cape Town*, Cape Town: Kwela Books and SA History Online.
- Erasmus, Zimitri and Edgar Pieterse, 1999, “Conceptualising Coloured Identities in the Western Cape Province of South Africa”, in Mai Palmberg, ed., *National Identity and Democracy in Africa*, Human Science Research Council of South Africa, the Mayibuye Centre at the University of the Western Cape and the Nordic Africa Institute, pp.167-188.
- Garman, Anthea, 2001, “Khoisan Revivalism: The Claims of Africa’s First Indigenous Peoples”, *Rhodes Journalism Reviews*, August, p.41, http://www.rjr.ru.ac.za/rjrpdf/rjr_no20/khoisan_revivalism.pdf, 2013年9月19日アクセス。
- Glyn, Patricia, 2013, *What Dawid Knew: A Journey with the Kruipers*, Johannesburg: Picador Africa.
- Hendricks, Cheryl, 2005, “Debating Coloured Identity in the Western Cape”, *African Security Review*, Vol.14, No.4, pp.117-119.
- James, Wilmot, Daria Caliguire and Kerry Cullinan, eds., 1996, *Now that We Are Free: Coloured Communities in a Democratic South Africa*, Cape Town: IDASA.
- Kynoch, Gary, 1999, “From the Ninevites to the Hard Livings Gang: Township Gangsters and Urban Violence in Twentieth-century South Africa”, *African Studies*, Vol.58, No.1, pp.55-85.
- Lee, Richard B., 2003, “Indigenous Rights and the Politics of Identity in Post-Apartheid Southern Africa”, in Bartholomew Dean and Jerome M. Levi, eds., *At the Risk of Being Heard: Identity, Indigenous Rights, and Postcolonial States*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp.80-111.
- Le Fleur, Andrew and Leslie Jansen, 2013, “The Khoisan in Contemporary South Africa: Challenges of Recognition as an Indigenous People”, Country Report: South Africa, August, http://www.kas.de/wf/doc/kas_35255-1522-2-30.pdf?130828123620, 2013年9月19日アクセス。

- Le Fleur, Anthony, 2001, "Khoisan Grondwetlike Akkommodasie", in National Khoisan Consultative Conference (NKCC), *Proceedings of National Khoisan Consultative Conference, 29 March to 1 April 2001, Outshoorn*, Cape Town: UWC Institute for Historical Research.
- Mountain, Alan, 2003, *The First People of the Cape*, Claremont: David Philip.
- , 2004, *An Unsung Heritage: Perspectives on Slavery*, Claremont: David Philip.
- National Khoisan Consultative Conference (NKCC), 2001, *Proceedings of National Khoisan Consultative Conference, 29 March to 1 April 2001, Outshoorn*, Cape Town: UWC Institute for Historical Research.
- Ntsewa, Tommy, 2013, "Talk by Adv Tommy Ntsewa on Work Done by the DTA on Khoi-San during the Khoi-San Dialogue 'Reversing the Legacy of the 1913 Natives' Land Act': Kimberley", 15 April, http://www.ruraldevelopment.gov.za/phocadownload/branch/presentations/2013/KhoiSan_15_160413/cogta_presentation_150413.pdf, 2014年1月8日アクセス。
- Peach, Mark, ed., n.d. (2010?), *Being Coloured: Coloured Identity, History and the Future*, Cape Town: WB Peach Media and Communications.
- Ross, Robert, 1976, *Adam Kok's Griquas: A Study in the Development of Stratification in South Africa*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ruiters, Michele, 2009, "Collaboration, Assimilation and Contestation: Emerging Constructions of Coloured Identity in Post-Apartheid South Africa", in Mohamed Adhikari, ed., *Burdened by Race: Coloured Identities in Southern Africa*, Cape Town: UCT Press, pp.104-133.
- Schoeman, Karel, 2009, *Seven Khoi Lives: Cape Biographies of the Seventeenth Century*, Pretoria: Protea Book House.
- Statistics South Africa, 2012, *Census 2011*, Statistical Release P0301.4, Pretoria: Statistics South Africa.
- Steinberg, Jonny, 2004, *The Number: One Man's Search for Identity in the Cape Underworld and Prison Gangs*, Johannesburg and Cape Town: Jonathan Ball Publishers.
- Waldman, Linda, 2007, *The Griqua Conundrum: Political and Socio-Cultural Identity in the Northern Cape, South Africa*, Bern: Peter Lang.

(佐藤 千鶴子, 日本貿易振興機構アジア経済研究所海外派遣員)

Emergence of Indigenous Identities among Coloured People in a Democratic South Africa

This paper discusses the emergence of indigenous identities among the coloured population in South Africa after the end of apartheid. The term “coloured” was a racial category labelling people who were neither considered to be white nor black (African) in the Population Registration Act of 1950. This group of people has diverse origins including indigenous Khoi and San, slaves and European settlers who came to live in the Cape since the mid-17th century. Due to the nature of the colonial period and the subsequent apartheid society where social hierarchy and privileges were determined based on one’s race, the coloured people tended to emphasise their ancestral connection and proximity to white people, while suppressing other ancestral roots including Khoi and San. This situation, however, changed after 1994 when the space created by the end of apartheid enabled them to explore their own roots and identities more freely, and an increasing number of them began to embrace Khoisan ancestry and identify themselves as Khoisan, as the aboriginal people of South Africa. The paper examines why this shift in their self-identification happened, why they chose and argued for Khoisan as their “true” identities, instead of embracing a whole range of other ancestries or creolization of various cultures, and what were the characteristics and demands of Khoisan revivalism in post-apartheid South Africa.

(SATO, Chizuko, Research Fellow, Institute of
Developing Economies - Japan External Trade Organisation)

